

小學讀本  
卷之三

T1A1

10

Ta84

田中義廉 編輯  
那珂通高 校正

第一

水の動物植物の養液として地球上に尤も重要なものあり水なきときは萬物生育することを得ず水は止水流水の別あり池水湖水と止水といひ河水と流水といふ湖水は陸地全く四面を環り中窪ある地は停れりなり

河水とハ山間の豁谷より湧き出づ海に注ぐをいふ

此圖ハ林中の湖あり此水の陸地全く四面を圍きたるゆゑは流を去ることあり

今ハ夏日ありや又冬日ありや木葉の茂りたるを以て夏日あることを知る○

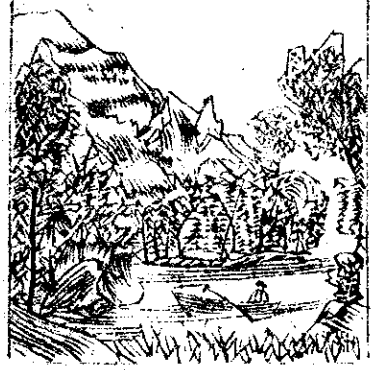
冬日ハ總て木葉なきなり○然り多く木葉あり唯松柏の類のみ葉あり○野草ハ冬日亦ての生ずるなり○否生ずることあり

汝ハ林中ハ鳥あり又水中ハ魚ありと思ふや○必これ何らん唯明を見ることが得ざるのみあり

林間ハ湛へたる水上ハ數多の水鳥ありて游泳

せり水鳥ハ閑静あるを好むものゆゑ其浮べる處ハ景色甚幽遠あり

此圖も亦林中の湖ありこれハ



前示したる圖の湖と同ドまり。○然り同ド湖  
 なれども我が見る所は因りて異なるあり、  
 今湖上は浮べる舟あり舟中も多くの人を載せ  
 たりこの人の携へたる長きもの何なりやと  
 れの水棹よて舟を動かす  
 具なり。○此舟は何れの方  
 へ行くやとさきを左の方  
 行くなり、

此舟は前の舟と同ドまり、  
 ○否同ドからば此舟は前



の舟あり大やして人を載せたり  
 何如して舟を進むるや。○此中六人の携へ  
 る権を操りて舟を進むるあり。○舟は権を操り  
 たる人の何れの方へ行くやといふも其後の方  
 に行とあり舟の艫と舳も居る人の何れの方  
 といふも先の人水前と測り後の人を操り操  
 きるなり、

第二

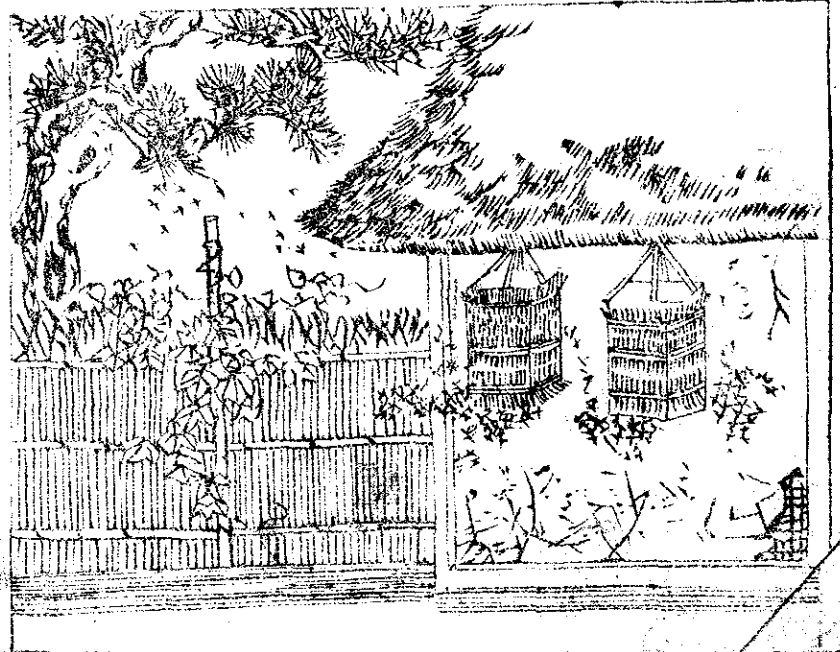
此圖は蜜蜂の窠の中を貯ふる  
 見よ其動實は容易ならん

天地の間は生と稟けた  
るものも蟲みらも猶か  
くの如し況や人と生れ  
たる者をや余今汝等ふ  
蜜蜂の蜜を貯ふる状を  
語るべし

此蜂も髪筋の如き舌  
あり此舌を花の中へ入  
きて蜜を吸取るあり

此蜂夏の際も旭の昇るを待ちて巢の中へ飛  
出種々の花を尋ねて其中より力の及ぶ限り  
蜜を吸取りて歸きり

其際は何如ある暑き日やも怠らば日々飛去り  
ては飛回り夏の永き日と一刻の時間の徒ら費  
はことかく蜜を巢の中へ積置ゆゑも冬も至り  
て一種の花無き時ふも食料乏しきことなり  
此蜂の巢毎も必秀でく大なる蜂ありてこれ  
を蜂の王といふ又懶蜂とて蜜を取らざる蜂數  
頭あり此懶蜂とばかりの能く勤むる蜂どもこれ  
を逐出たして共は巢の中へ棲まざるなり



汝等の幼時より、日々勉め勵んで此路の耻ぢなき  
 る者ありしが、くづくも一息情や、其業を勉め  
 すること此懶惰の如くならんば、此世間の人も疎  
 まれ、遂に其與り交るものもなきに至るべし

第三

人と交るふの真實の以て、決して虚言すべ  
 からば、○衆人の對して親切に交り、言の必忠信  
 と主とする時、衆人も亦我を愛して、其身の自  
 幸福を得べし

汝等の虚言の罪、一たびもなすべからざるべし、  
 の惡事も事、屢に聞き聞けり

若し虚言する時、人皆汝を棄て、顧ざるべし  
 此の如くなるべし、何ぞ以て、身の幸福を得  
 べき

自其惡事も、知りて、虚言したる後、汝の  
 心は快からず、○否、快からば、

然らば、汝の心は惡事も、知りたらば、決  
 てこれを犯さず、からば、縦今人の見ざる所まで  
 も、常に父母教師の面前、其行状を慎む  
 べし、これを獨を慎むべし、いな、なり

故に善見やして正直ある兒ハ神の助を得て其  
身の幸福を享ること疑無し、

若又誤りて心迷ひ破り書や汚し戸の鍵を失ひ机  
上の墨を翻せる時おど

又父母教師の前に行き  
自其始末を訴て罪を謝

せべし是唯小人を欺り  
ざるのみならず亦自欺

りざるなり、



自欺の者も人とならず只此一事ハ到底善  
人となるべまの道あり、

人と約してこれは背くを不善の甚きものか  
り必衆人の擯斥を免を得故一旦約したる

言を務て正實を行ふべし苟信を朋友に失ひ  
縦令學術に通達とも生涯身を立てること能

ざるべし  
悪事ハ小ありといへども忽ちあすべからば其

一念漸長あるときハ是非を明かす善悪を審み  
あること能ざるに至るものあり人として是

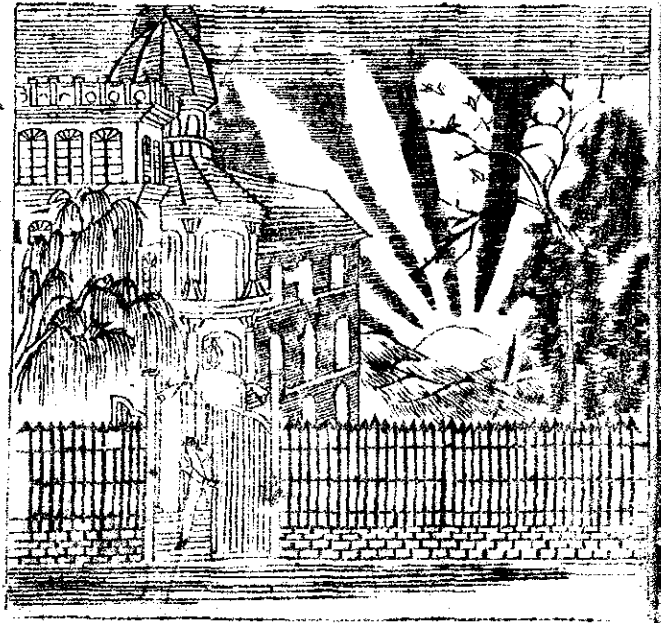
非善惡の心無き者ならずれば常は善小就の徳  
を去り是を行ひ非を拒ぎ虚言をせむ約束の背  
ず其快うらんことを求むべし心まことより快  
を意を誠みよといふ此の如くあるとせば必衆  
人の敬愛を得て神の助を蒙り其身小大なる幸  
福を享るものなり

第四

夜将子明けんとする時雞先鳴く夜既小明くき  
バ鳥雀鳴く

夜明け後ハ眠ること  
何らば人としつて鳥雀  
の聲を聞くとまよ直ま  
起き出つべし

神ハ晝間人々も日光を  
與へて其業をなすま使  
ならしむ然るも夜明けて後まで猶寢所を在る  
と神の恩を棄るあり故に汝等必夜明けぬれば  
直ま起き出づる業を就くべしとま身を立てる





の初なり

幼稚のものハ夙ふ起きて勉強し無益な時を  
すことかけきバその習性となり壮年の後業を  
勉むるふも倦怠の心を生ずる事となり

夫神ハ必勤むる人ふあらざれを妄な物を與へ  
ばして勤むきバ物を與ふるものおきバ身の勉  
強ハ幸福を生む母なりと知るべし

されバ人々能く勉強して身の幸福を求むべし  
勤むれハ必功あり情きを必功とし今日勉めば  
明日ありと云ふことありき今平學堂

も来年ありといふことなれ光陰を矢の如く  
一塵去りてを復還らず壯年は至りても一業一  
事と首い得たることもなく遂に貧窮困苦に陥  
るを皆自招くの禍あり

第五

二人の童子あり共野に出で樹陰の息入り  
此の地の野草灌木茂きを以て氣候の夏ある  
ことを知る

一人を二巻の書を開きていさを讀み又一人を  
坐して其文を聴くことを喜ぶは似たり我其聲

を聞かざればも今其顔  
 色を見て其心は喜べる  
 ことを知さず。○何よよ  
 りて喜悅の心顔色は形  
 たるや。○微しく笑へ  
 る色あるを以て其喜悅  
 の心あるを知さず。



人其口を開かずとも其笑を今あるは心は喜の  
 あるを告ぐるや如し顔色を喜怒哀樂人知ら  
 ず。凡裏も喜怒哀樂の情なきは如何はことを隠さ  
 んとあるとも顔色の微は覆ふべからず、  
 されば人其對してを不平の心を懐るは親切な  
 遇さべし何となればも我心は毫も怒をふく  
 と又ハ不平の心あるは必顔色は形ある者家  
 ればなり其他或ハ不幸なるとき或を倦怠せる  
 と其比其心を顔色は形として人其知らぬま  
 ることなり。

第六

凡世間ある人其貴きも賤きも父母より生ま

れざるいなす故ふ父母ハ我身の出で来一本なき  
き本ぞ忘るまじきことなり況てや養育の恩  
山よりも高く海よりも深くして幼き時より晝  
夜艱難苦勞して抱き育てられたるをやされば  
深く其厚恩と思ひて孝順の心怠るべからず  
子の父母まつかへて孝順なるハ神より命した  
る務なればこれを忘るべからず苟不孝の行あ  
れば唯ま人の憎を受くるのとなりば必神の責  
と免きざるものなり

ふるもの故に命を神に依て我を授けりて幸福を興  
父母ありされば父母ハ神と同ドク敬ひ尊び何  
事も逆ふことなきを孝順といふ

苟父母の命も逆ふことあれば神の責を受けて  
禍も罹るまじり父母の誠をわが身の及ばざる  
所を補ひ助くる所なりて即神明の命ありと心  
得決りて背くべからず

昔年一人の男子あり其人となり温順ありて幼  
稚のときより両親も孝行たぐひなきものあり  
ま其家固富めるものはあらざれども貧ま人を憐

み凡て人子交るま信實  
 なるゆゑよ誰いふとな  
 く此男子と善人と呼な  
 せり幼き時の近郷の家  
 み僕たりしが夙ふ起き  
 て一事一業の怠ること  
 なく暇あるときの手習  
 お心を盡し又好きて讀  
 書算術と學びし由る幾



主人より暇を興ふるとまじり巳の隨意を遊ば  
 どなく也我家は歸りて父母の安否を問ひ答  
 膝下を居て事お従ひ父母の心を慰ふことと勤  
 とせり

主家を出で後ハ瑣細なる商として渡世せ  
 ぐ人々此男子の正直あるを知て其物品を信  
 けし幾しなく稍豊まなまなり  
 其後父を喪ひて母のこゝを養ひたるが書夜怠か  
 く介抱して其心は遠ることなく儼より母の厭  
 嫌ふこととならば常の善事と好んで慈愛の心

禽獸草木まで及びひけき其家次第の繁榮して  
富有の身となれりぞと

宜多の孝の萬善の本といへること此男子の生  
涯の正直慈惠學のすしと此ふ至きる者皆孝よ  
り生ずる所なり

子の父母は仕つて孝順なるべまの天地自然の  
道よしと須臾も怠るべからば然るべし外物の  
為らばを奪はれて其道や失ふ者も少なかからざ  
れ常よ其心を守り自然の道や怠るべからん

孝くすること何の難しきこと哉  
く図法を遵守して各其業を勤むべし凡人の子  
たるもの幼時より親を事ふること此男子の如  
くせよあるべからん

第七

此圖せる所の田舎の富家なり其四面より茂林  
花木ありて宅前の平地より芝を栽たる好き景  
色の所あり

汝はこの家の圖を能く見て其様を知るべし  
此屋を數多の棟に分きたり

人の少年を一生中の春時とせむは才能の種を  
蒔くことあり、

少年の時を精神の充満し年數の未遠けきと勉  
學して生涯の安樂を冀望すべし、

少年の時も勉學せざるものごと一年の春時も種  
子と時とせむと同ごと生涯知識を開くことな  
し、

斯る少年等を縦令富貴の家は生まるとも遂に  
いふ貧窮とならん、

識と行状を賜ふ。富貴賤ある人の智識の勝  
て行状も亦正しとき皆少年のとき能く勉學び  
たるものなり又貧賤ある人の智識もかく行状  
も亦正しからずこれ皆少年のとき勉學いさる  
ゆゑなり、

されば人々幼少のときより師の教示に従事し  
て一身一家を立つることを學ぶべし、

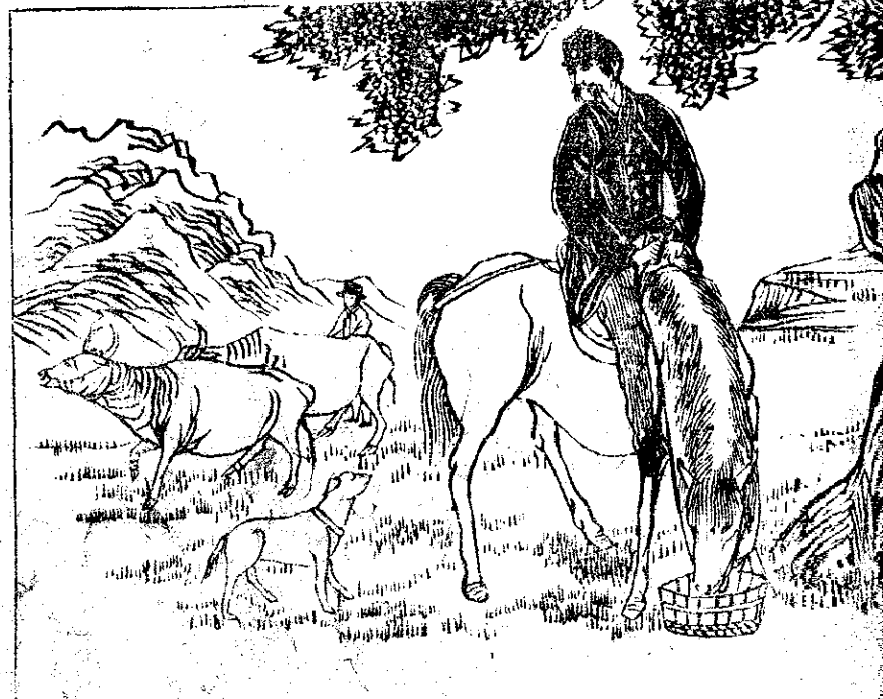
師傳を父母も替りて兒童を訓誡し善道を進む  
ことを教ふるものゆゑ我身も善教と學術とを  
授けて我利益となはる由り父母も等しく尊敬

して其恩を忘るべからば

第九

人も萬物の靈なきべ禽獸チヤウシヤウシヤウ魚イサと異なりて能く  
真直マコトま立ちて歩行アホウは獸を能く物を見香カを嗅ニヒクき  
聲コエを聞クき食クを味アジふる人ヒトと同トトと雖シ其歩行アホウす  
るふの立つこと能スかず又聲コエを發ツクせれども言コトを  
出イダだして語カタルることを得エべ人ヒトは能スく言コトを出イダだ  
て意中ココロで語カタルることを得エ又能スく諸物モノを推考サカサマして  
物理モノを解トクす是其異イヘなる所あり

をきこの世界の全マタ人の住居アトなる為ナリ神カミの造ツク  
りたるものよて世界セカイ  
を即人の住所アトなり  
既人の為ナリ此世界  
を造り日あり月あり  
て物を照らしまほし其  
目を歡ウレシむむあるまえ  
地上チノふ芳草クサを羊ヒツジ下シ梢  
頭カブふ美花ウツクシを開ヒラくむ  
人の食物クダモノを須スむるも  
のゆゑふ田野タノふ於コて



穀物を興へ山林に於て鳥獸を興へ河海に於て魚類を興ふ

七

人々衣服を須むるゆゑ木綿と蠶を生ぜしめ或は野獸の骨を長き毛を生じて衣裳を製ることを得しむ

人々家屋を造り又諸の器械を須むるゆゑ土地中より銅鉄なども出だしてこれを造らしむ凡て人の関くべからざる物を一として興へざることなし

人々子孫を好むゆゑ鳥の卵を養ひて食ふ香を好むゆゑ花を香かき薫る薫る草木を焼きて以て煖を取るべしこれ皆神の賜ものにして所としてこれ有らざるべし凡此地上及

河海の萬物を禽獸蟲魚山林草木の花實に至るまで皆人を養ふべし為す神の興へたるものなり神既此諸物を人々興へて足らざるものあらざらん故も人々慎んで神の賜ものを受け衣食の生活を計るべし

然れども惡心惡行の人を此賜ものを受くること



と能くべりて生涯貧窮なれば其安樂を願はん  
ふら必勉めて善を行ふべし

第十

爰も二人の童子あり一  
人と手ぬ書を持ちてこ  
きを讀めり此童子を勉  
強して能く書を讀むと  
見るたり

其書の久しく用ゐたる

の如く因むる此童子も怠惰を以て又書を  
大切をせむることぞ知れり

彼を日々學校へ行きて小學讀本を學び習ひ得  
たる所の章を能く誦讀して念ふることなかる  
べし

今一人の童子を怠惰のものぞ見えたり何如ま  
となれど彼が持ちたる書久きに汚きまゝの所を裂  
け破きたるものあり

此童子を勞して書を讀むと雖怠きたる處數箇  
條なれば通して讀むこと能く彼を固書で好



まがらるゆゑはかく學びしる所を多く忘るるなり  
汝も彼の顔色を見て書を好まざることを知き  
りや○彼の顔色の怠惰なるを表せり彼も善  
良みして能く書や讀むことを好まば其顔色斯  
の如くみ見ゆることなり  
善良なる童子ハ斯る顔色とを異みして必聰敏  
み見ゆるものなり  
彼を能く心を用ぬざるゆゑは其書の破を汚れ  
たり斯る懶惰の事と遠く相違すや

第十一

昔時○人の怠惰あるものありて常小職業とな  
さば今これを次の圖に示せり  
此ものも幼稚のときより怠惰あるものゆゑ物  
事は勉強あることなく己が職たる業を為さず  
と能く書や徒ら坐するや或唯眠るのみ  
彼壯年に至りても猶少時の怠惰を改むること  
能はず故に其家貧乏して衣裳も帽も甚古びた  
り

彼も好き衣裳を好むるふもあらざれども金  
なくして何如もぞ好き衣裳を買ふことを得ん  
や又其業を務めずして何如もえ金を得べけん  
や

彼を家は妻あり○其妻  
と何如なる衣裳を著る  
うと思ふや必破きたる  
衣裳を著たるなるべし  
彼も時として少しの金

か得ぬを以て衣裳かごとを買ふことあらず  
其金を無益に費せり今その状を次子に説きまべ  
し

第十二

此圖を即前の怠惰ものに  
して今日少しの金を得た  
りされども平日酒を好む  
の癖あるもえふ巴の家は  
歸らずして直ふ酒店へ行  
きたり



彼を甚天酒やして得たる金の盡るまで酒を止むることあり

彼十分酒を飲むとき其心狂亂して暴行をなす或は路傍に倒れて前後も知らず眠ることあり

是故に時として少々の金を得ることあれば酒の飲酒の爲にこれを失ひて衣裳等も求むることを得ば

此急情と飲酒とを極めて悪事やしてこれより能く金を得ることなり○金を得ることなきは我日用の品も乏しくして萬事不自由なり故に或悪く道もてり金を得んことを願ひ屢人を欺くに至るものなり○されば平生戒むべき急情と飲酒なり

第十三

既前示したる急情人の飲酒すること益止まばりて其の職業をなばことなり稀も職業をなさんと思ふ心の生ることもあれども如

少より懶惰は慣たる身ゆゑ其身を救ふ  
従ふむること能はずして日々慢遊を事とし  
一錢をも得ることなし

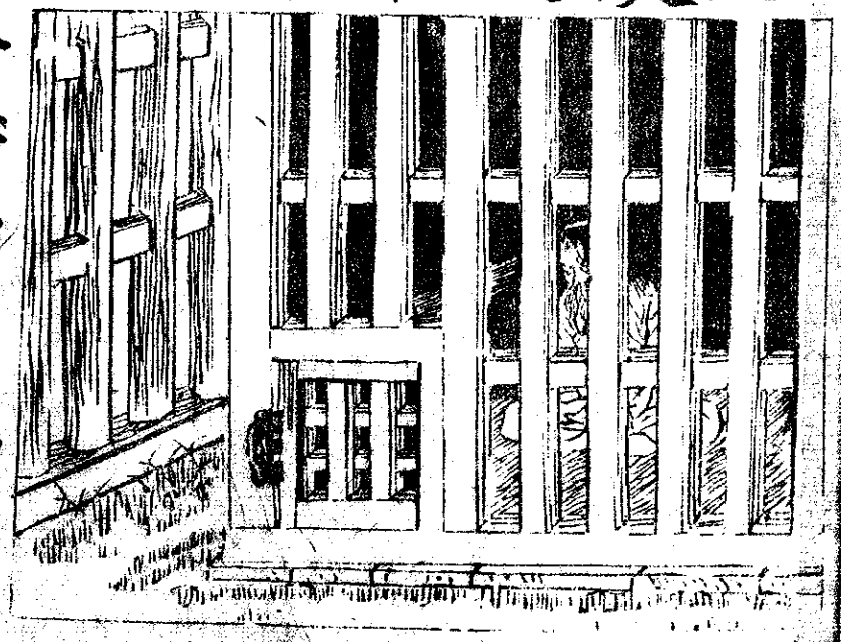
然るども飲酒の心を止むることを得ば何如ま  
らして金を得て飲酒せんと思ふ一念增長して  
終は悪意を生じ夜々近傍の家も忍入り金銀を  
盗取りて飲酒の料とあせり

斯る悪業をやつて發露せざること無けきば遂  
に捕られて獄中み繋ぐまたり

今日お至りては  
滴の酒をも得ること能  
とげして只一人暗き處  
に坐し絶て心を慰むる  
ものなり

既ら悪事を犯されば  
今更悔悟といへども  
身を救ふの術なくして  
終ら獄中み死せり

家も妻も小兒あり其妻を何如し身も養



ひ又小兒を育つるや其次第の次條も説くべし

第十四

此獄中も死したる人の妻を貧乏家もありて小兒を育てんとすきどもかねて一錢の貯蓄もなく又其夫の悪事となりて獄中も死する程の者なれば村里の人々これぞ憐れ助くるものなり此故に妻は他人の衣裳などを洗ひ僅か其日の活計をなせども素より女のことゆゑ多分の金を得ること能はず動もされ其小兒を餓死

むることあるや如何にともみまはるやかく日  
夜悲歎して居たりしが  
終るも其家も住み難  
くなりて小兒を携へ故  
郷を立ち去きり



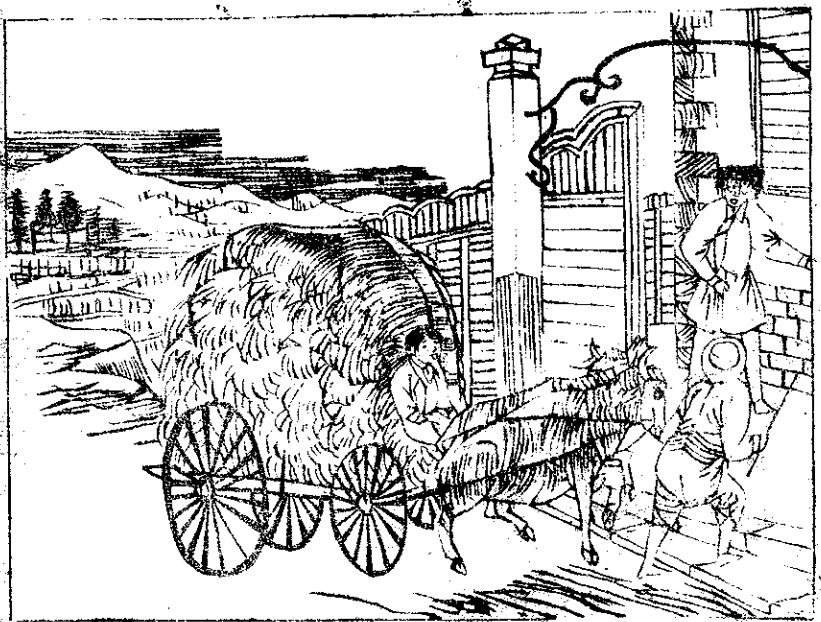
そき酒を能く人を昏迷  
せしめ亦人を狂亂せし  
む○人の困難あるも人の悲歎するも人の争論  
するも又無益の言を出だはれも道理なき事を行

三十一  
三十二  
三十三  
三十四

ふも皆酒のなまじむる悪業なり

第十五

此圖と田舎の景色あり  
いま畠よりの穀物を積  
たる車と挽きて歸り家  
の門をいらんとす



汝も此穀物を何なりと  
思ふや○こきて小麦  
久此穀物を日は乾く  
穂を打ち落し實と莖と  
を別つ○其のち磨めてこれを挽き小麦粉と為  
し各家を貯ふ

此小麦粉を饅頭索麵等を製するふ用あるもの  
なり

麥の種類と小麦稗麥大麥あり是等と大豆稗粟  
等を悉穀物といふ穀物を皆動物の食と為して  
身の養となるものなり

第十六

爰ふ一人の男あり其子兄弟二人を集めて種々  
の珍しき話を聞かせむ

父曰予前年此世界を一週せしとき、数多の國々  
に到り種々の物を見たり一度甚しき寒國に到  
ることありし三個月の間日光を見ることな  
く其間の常は夜なり此國の住民の雪又の氷を  
以て家ぞ造り人々皆其内に住あり○兄弟曰斯  
る國は何處ありや○父曰此國を地球の南極  
と北極とを近き處あり

父曰予其國は於て一の高山を見たり其頂上の  
甚高にして甚寒し頂上にはある雪はたえて融く  
ることなし○兄弟曰此山は於て何處あり其頂上  
に達せしむる前の凍死す○兄弟曰太陽は何ゆゑに

其雪と融らざるや  
又其處は夏とありざ  
るや○父曰其國は夏  
といへどの我國の寒  
中より尚寒し又頂上  
より火を噴き出たる高  
山ありて噴き出づる  
烟を恰も烟筒の烟の  
ごとし予其烟を見し



一ノ書ノ  
二ノ書ノ  
三ノ書ノ  
四ノ書ノ  
五ノ書ノ  
六ノ書ノ  
七ノ書ノ  
八ノ書ノ  
九ノ書ノ  
十ノ書ノ



は我家の烟筒を集めて二万以上に至らざるべ  
かゝる烟を出でざるべしと思へり

此父の話を長大なることなれども決して虚言  
にあらば真實の話なり

父又曰予大海を渡るとき漁師の捕へたる鯨を  
見たり此鯨を殊に大なるものにして長さ凡十  
間餘ありて體の高さ三間餘あり數多の漁師を  
鯨の脇腹に穴を穿ち腹中に入り桶を擔ひて其  
膏を汲み出だせり

其他犬ある獸類を數多見たりと云へり兄弟の  
兒の喜ひて父の話を聽き居たり

凡て小兒の謹んで父母の話を聽くべし

それ父母の言を我身は益ありて智識を増し道  
理も適ふものなきは子なるものを柔順なり  
其教も順ふべしこれ身を立つる基なり

父母を我を育てて年も長し智慧も優きたれば  
其教も順ふことなりと云ふて親の訓誡を國  
の制律と同しく敬し畏きて假ふもこれ皆く  
べからず

第十七

一女兒池上より小舟を浮べたり其舟の帆は只  
一張なり女兒は此舟に結付けたる長き紐を操  
りてこれ舟の遠く流るとも失わざる為なり  
此小兒の浮べたる舟は一本の櫓あるはるまじ  
きをスルーフと云ふ

凡て舟の櫓も帆を張り風を受けて舟を行るの  
なり大海に浮ぶる大船も同一理なり又一男  
兒も小舟をもちてこれを池上より浮べんとす  
此舟は二本の櫓ありこれをスクーホント云ふ  
三本の櫓あるときこれをシンツツと云ふ  
なり

凡て斯の如き舟を帆前  
船といふ帆を張りて行  
るも急なり帆を麻の厚  
き織物にて造るなり  
船中にて人のさくらく  
處を甲板といふ○船の  
首を艫といひ船の後を  
舳といひ右の舷を面楫といひ左の舷を取楫と  
いふ○船後は突き出て水中より入りたるもの



山崎書院 卷三 文部省

を舵といふ舵の船の行くべき方角を定むるのなり。

第十八

神も此地球を造り人民の生活する為は用ゐる物をぞ皆此地球上に生せしむれば人々其道を盡してこれを求むるときは何物をも得ざる事となり然るも人々の善悪と勤怠とは因りて物を得ると得ざるとあり且又人の務は従ひ物を得るも差等あり。

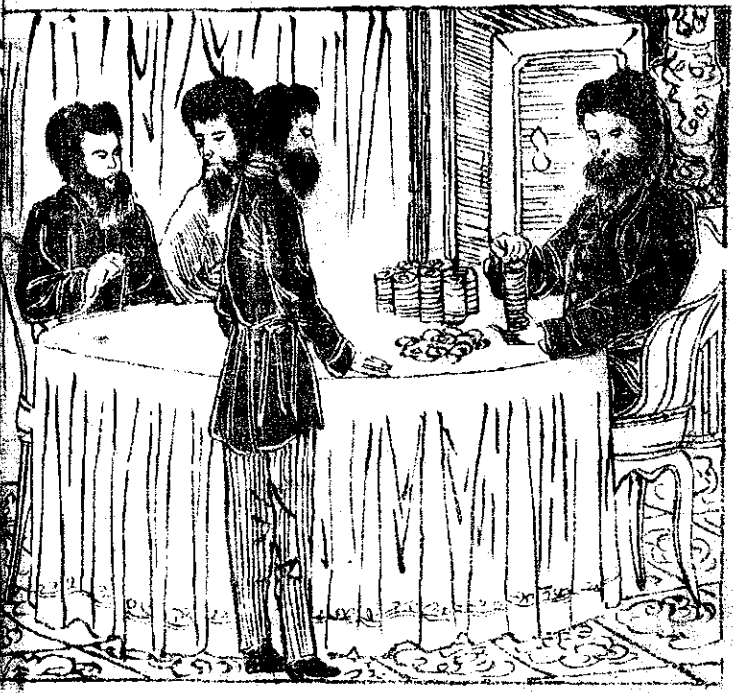
今遊戯のみ耽りて少くも心を他事に用ゐざれば此地球の徒は遊戯の場所となるのみ又財を蓄るものみ勞して心を他事に用ゐざれば此地球の只財を積むの場所となるのみ

も一風車等の機關を設けて世間も利あることを計るときはこの地球の種々の機關を設くべき場所となれり。

人を能く心を用ゐて世間も利あることを計るべし世間の利ある時の亦必我身も利あるものなり此の如きときこの地球を生ずる神慮も合ふといふべし

今この圖を畫けるも、富人多くの貨幣を出が  
て、衆人も示すも、衆人これをみて大に感ずる  
所あり、蓋此輩は斯る  
多くの貨幣を得たる  
ことなきゆゑなり、

此富人を嘗て學校ふ  
入り、多年の間勉強し  
て、百般の學術を覚え、  
先きは種々の機關を  
發明し、大に世上は利



益あることを工夫し、今亦其身に大利を得て、其  
る富人となりたるなり、

富人衆人も告げて曰夫この地球は大活物なり  
て、勉むべきは必其報めらざることなし、人能く勉  
めて世に益あることを工夫するも、苦勞ある時  
は、其報も大なりして、利を得ること多きものな  
り、もし骨折するも、業を為し、或は只一身に利あ  
ることを勉むべきは、其報も少なりして、利を得るこ  
とも亦少し、予も多年の間刻苦して、纔に利を得  
たれども、今は至りて、猶無益な時を費やすこと

なく亦無益の財を賣やまことなる固自勉を得たる貨を売の皆我有ふしてこれを賣やばの隨意なりと雖無益を賣やすは正道ありす若美服を以て人は驕り又僅の貨幣を得るとは心は急を生ずるは實の愚もして且不善なり

貨幣の最要用あるは衣服食糧を購ひ或これを貧人に與へて其饑餓凍餒を救ふあり

貨幣を得てこれを惜し貯へ世間の用は供へば又貧人も與ふることあり又我富を以て他人を驕るなどの愚もして吝なるものあり人も必これと憎み神も必これを罰せん

是も貨幣の用ある道は由り善きものとなり又悪きものとなる故は道の當否は従ひ利害も是も此貨より起るものなり

故は急情やして貧賤あるは實の耻づべきことなれども貨のなを愛著するは害の根本なり人々出精して其業を勉め其富を計るべし既富めるは至らばこれを世間の用は供へて貧人を救ふを第一とすべし

第十九

平生断えず業を勉むるハ樂しからば又断えバ  
遊戯を事とみるも樂しからば故に就業の時間  
を出精して業を勵む然る後に出遊する時にそ  
の樂を覺ゆるものなり、

就業中に出精せざるに其ハ其心ハ耻を懷き  
快からば行の善良あるに心の快きを得る良法  
なる急情なるもの心の快きことなり何とあ  
きハ其行状の不善なるゆゑに恥づる所あるに  
なり、

一事を成さんとせば必其心を放つことなく  
時をこれを為し或事業多くして力ハ餘ること  
とありとも怠慢なくこれを勉むれば必其効あ  
りて能く成就に故に勉むるに何事も易く勉め  
されバ何事も難し、

書を讀まんとするときハ如何に難き所まで  
もこれを止めば勉強して得る所あるハあらざ  
るに他事を為ることなれば縱令力ハ餘る箇條に  
ても餘念なく勉強するときハこれを理會せら  
るるものなり、

苦なげきは樂あらば勉強の後ハ非ざれば遊歩

も樂あらば故に書を讀む時ハ其文を理解して  
後子遊歩まべし業を成しよときハ其業を成就し  
たる後ハ休息まべし然るときハ心は恥すること  
とあきを以て遊歩ハ身の攝生となるものなり  
抑耻を人心に於て感動の大なるものあり恥を  
知るときは人々怠慢放肆なることなり平生事  
を行ひ業を勉むるは方りて我心は恥づること  
ならんことを欲するは身を守るの要務なり  
今業を勉めて就らば書を學びて通せざるを大  
なる恥なるべしこの耻を知りて出精勉強する  
とき業の就らざることをなく書の進せざるこ  
とならん

人の世は生れ来しを天工を助けて國用を資する  
ものなるふ何等の業も勉めば國家の益となさ  
ざるものハ自禍を招きて困窮に陥るべし此等  
を天ふ恥ぢんは恥ぢ又我心は恥づること大なり  
神を喜ぶ幸福を與へば人を以て自これを取ら  
しむるものおれば唯恥を知りて能く勉強する  
者の幸福を得耻を知らざるものを幸福を得

ること能はざるものと知るべし

第二十

禮を教化の本にして人民の惡念を止め善心を開き人道を離さしめざるものなれば須臾も違ふべからざるものあり

人性を本善あるを以て辭讓の心を有せざるものなり然きとも人欲の私を由りて本然の性を失ひ遂に放肆遊惰のものとなるなり

人々幼稚の時より人欲の私を克ちて本然の性を復たすべし父母の事なること孝の義を尊ぶべし

長上を事ぶるときは恭敬なるべし兄弟の友愛

も朋友の信義も親族の協和も皆禮より生ずるものゆゑ不禮を身と立るの本なりと知るべし貪欲の念を肆はざることなれば忿怒の心を總はすることなるとき貪欲の念まじき忿怒の心あるときは事を行ひ業を務むるは當りて正路を得ること能はざるものなり

そき貪欲の私情の惑にして此念を肆はざるときも遂に殘暴の行をなすに至る又忿怒を一時の狂疾にして此心を抑へざるときは遂に争闘

の狂疾にして此心を抑へざるときは遂に争闘



の端を開くに至る必竟ハ皆幼稚のときより解  
讓の心を失ふまよきり、  
古語ハ謙を益を受く満を損を招くといへり終  
日業と務むまご心中ハ爽快を覺え今日遊食家  
れハ翌日繁忙の愁あり古語ハまの終身道を讓  
るとも百歩を枉げば終身畔を讓るとも一段を  
失をばといへり是禮讓の得ありて損なきを論  
せるものなり、

第二十一

昔一人の童子あり天性至孝なり善く其母ハ  
事一毫も其命ハ違ふことなし母事ハ命する如  
し直ま立ちてこれを行ひ常ハ怠らば  
母嘗て紡絲を繰りて絲環ハ紆ふことあり其子  
ハ命して紡絲を手に掛けしむ童子も絲を紆ふ  
るの間過ちてこれを紛亂解けざるゆゑ急ハ  
これを解めんとするも却りて緒を失へり、  
童子既みして一の緒を求め得たるゆゑ頻ハ  
これを引けば益固結して復解くべからざるハ  
至る因りて更ハ狼狽して一線を断せり母これ  
を止めて曰汝過ぎる此の如くする時ハ適ハ其



紛亂を益まのみ警汝が  
心を静め思を平ふして  
正き緒を求むべし既ま  
正き緒を得きば亂れ  
る緒を自解くるものか  
りと

母又童子を告げて曰夫  
人世の業を務むるは猶亂きたる緒を理むるが  
如し是を監り宜しく汝の終身を計るべし世に  
處し事臨みて尚私欲怒を惹かば血氣を  
徒ら勞して功なきのみと

小學讀本卷之三終

明治十七年二月十三日 翻刻御届  
同年三月廿日 刻成

翻刻人

福岡縣士族

古賀男夫

福岡縣福岡區福岡橋町  
廿三番地

大蔵小學板

竹見三幸 勲

大草 勲

三八松

若原 実

社会科

社会